はまゆうと桜貝と
海光るわが故里

鶴沼

第十五号

河童忌特集

鶴沼を語る会

龍之介水虎の図を
市中主模写

芥川龍之介晩年の消息

冨士　山

龍之介が昭和二年七月二十四日に自害してから、いまや満五十六年になろうとしている。龍之介と同時代の同僚などにくらべて、今や龍之介に対1する思慕は深まる一方と見える。

私は大正十五年七月（龍之介自害の恰度一年前）に、龍之介を三ヶ月にわたり診療し、診療から満十年目に「文芸春秋」昭和十年十月号に寄稿掲載して貰った。

その後、龍之介全集や斉藤茂吉全集中の書簡篇を精査し、龍之介晩年の消息を列記することにした。ただし私の話は龍之介の健康問題に関する方面に限ったもので、文芸的活動のことは、専門違いであるから、ふれないことにする。

（追加訂正箇所）

文春十年十月号に、龍之介の年令（初診時の）を（卅七歳）としてあるのは、三十五才の誤りである。

大正15・1・1　湯河原　中西屋に宿泊。

2・19

4・22

5・25　鵠沼　東家へ

6・8　妻、也寸志の三人で鵠沼　東家へ。

6・16 ↓　斉藤茂吉からの書簡（妙薬を持参

仕るべく）

15・6・20 ↓ 小穴隆一宛書簡（富士山という医師にかかった。）（富士曰く、これは龍之介の誤解）

6・下旬（多分25～26日か）

6・29 田端より佐々木茂索宛（腹の固まり次第鵠沼へ行き、何か仕事をしたい）

7・上旬 妻、也寸志の三人で鵠沼東家へ。

7・14 ↓ 室生犀星宛（二十日過ぎに子供が来たら海へ入りたい）

7・20 東家から付近の一軒家イの四号へ転居。

7・21～22比呂志、多加志。田端から来て一家一緒になる

7某日↓ 田端の芥川家へ手紙（多加志病気、（23？）比呂志を四～五日預かってくれ）↓

7・26～27龍之介だけ東家へ戻ったか。

7・27 富士は東家で龍之介を初診した。龍之介一人ぼっち、周囲に誰もいない。

7・29 ↓ 佐々木茂索へ書簡（再び富士さんの厄介になると。）（富士曰く、龍之介の誤解、二日前に初めて富士の診察をうけたのに、再びとはおかしい）

8・7 龍之介富士医院へ受診にくる。薬とりに東家の女中二～三回くる、

8・15 龍之介の簡単な手紙を持参して。

8・16 龍之介富士医院へ通院（富士はブロモコル投薬）

本人の要求により連日一六回のオブタルソン注射始まる。連日と申しても日曜日もあること故に最後は九月二日過ぎであったかも知れぬ。

9・2 ↓ 田端から中根駒十郎、室生犀星宛の書簡がある。

9・中旬 富士は多加志へ往診（イの四号）龍之介の顔は見なかった。多分東家か。

9・20頃 柴さんの二階家へ一家転居。

9・25 斉藤茂吉、土屋文明訪問、ハラン1鉢持参（長寿の祈りをこめて）

10・某日 川端康成、龍之介の紹介で受診に来る（文春十年十月号に記載あり）

10・中旬 富士は散歩中龍之介に会う（文春に記載）

11・21 ↓ 茂吉宛書簡（阿片エキスを送ってくれ）

11・28 ↓ 茂吉宛書簡（オピアムありがとう）

12・2 ↓ 佐々木茂索へ書簡（アヘンエキスなど食って生きているようだ）

12・4 ↓ 茂吉宛書簡（オピアムを毎日のんでいる）

12・13 ↓ 茂吉宛書簡（アヘン乏しくなった。二週間分欲しい）

12・19 ↓ 茂吉宛書簡（お薬ありがとう）

昭和元12・25 ↓ 鵠沼から滝井孝作宛（鵠沼イの四号とあるが既に向いの二階家へ移ったのであるから、イの四号とはおかしい。なお、この書簡は鵠沼からの最後のもの）

12・31 鵠沼で越年

2・1・2 一家田端へ引きあげる。

1・22 ↓ 田端から青山の茂吉へ（阿片を頂きおる事は、こちらの医者にかくしてあるからまた頼むという内容）

2・1 田端の龍之介へ青山の茂吉より（バイエル社の眠剤を送るなど、書いてある、この手紙が茂吉全集では茂吉から龍之介宛の最後のものとなっている。）

2・2 ↓ 茂吉宛（お薬ありがとう）

2・11 河童発表（Kappa と発音して下さい）

3・27 ↓田端から茂吉宛（普通のたより、薬の事は書いてない。芥川全集では茂吉宛の最後のものとなっている）

富士記 龍之介の姪葛巻左登子さんによると、二月以後は龍之介は度々青山の茂吉の病院へ受診に行っているので、阿片をくれだの、阿片御送り下され有難うなどの書簡がないのは当然である。半年程前からずっと用いていた阿片服用は中止できるものではないので、死の前まで用いていたろうと考えるのが医学的常識である。しかし二月以後は割合に元気のようで、多数の文芸的発表あり、谷崎潤一郎との間に文芸的論争もある。北海道へ講演旅行にも出かけている。

7・24 最後の作品を書きあげて、田端の自宅でベロナール及びジアールの大量をのみ自殺した。

富士の感想

龍之介の死については多くの人は、龍之介の健康がわるいところへ、精神障害が亢じたためと考え勝ちだが、富士の考えでは、龍之介自害の前年夏頃から、斉藤茂吉が龍之介に乞われるままに、阿片剤を度々送付し（其の後も通院の度毎に与えたものらしい）、ために、龍之介には神経精神障害の他に、麻薬習慣性が加わり、為にますます健康をわるくし、遂に死を選んだものと思う。さすれば、龍之介の自害の責任の一端は、茂吉にもあるものと考える。

以上

（昭和五十八年五月二日記）

（参考資料）　富士先生が、龍之介の誤解であると指摘された大正十五年六月二十日付書翰は次のとおりです。　（節堂記）

拝啓　度々お手紙ありがたう。僕はここへ来る匆匆下痢し、二三日立って又立てとつづけに下痢し、とうとうここのお医者にかかってしまった。お医者の姓は富士、名は山、山は「たかし」と読むよし、唯今弟についている看護婦について貰らひ、やっとパンや半熟の卵にありついた次第、下痢のとまり次第帰京したい。一人で茫漠の海景を見ながら横になってゐるのは実に寂しい。以上

六月二十日　　芥川龍之介

小穴　隆一　様

（参考資料）　その二

富士先生が、「三十五才の誤り」と訂正された「文芸春秋十年十月号」の龍之介の年齢の部分はつぎのとうりです。なお龍之介を初診されたようすが，まことにリアルに描写されておりますので、その部分をここに掲げます。

（節堂記）

（抜粋）

芥川龍之介の憶い出

富士　山

一昨年医師法が改正になり、これまで十ヶ年保存して居なければならなかった患者病歴箋等が五ヶ年でよいことになり、其だけ医師にとっては荷厄介が減じた。私は過日古い病歴を、処分して居ると一枚次の様なのが出て来た。

大正十五年七月二十七日

芥川龍之介殿（卅七歳）

病名　神経衰弱

氏があの静寂な死を撰んだのは昭和二年七月廿四日であるから正に1年前の事で、今から丸九年前の事である。色々憶出される侭に廻らぬペンを採って見た。

其は土用の盛り、夕刻に近い頃だった。程近い東家から芥川氏が悪いから診察を頼むとの電話で出掛けた。毎年の事ながら夏場の東家は避暑客で満員だった。子供達は廊下で騒いで居た。案内されたのは二階の一番奥六畳の室で、相模灘、江の島が手にとる様に見え眺望至極良い。初対面の氏は道すがら想像して来たとは別個の仁であった。文士という面影はどこにも無い痩せた物静かな人であった。梳らない頭髪は蓬々と伸びてゐる、どこか禅僧とでも云いたい感じがした。氏は元采胃腸弱くアトニーと医者からいはれて居るが、数日来亦々胃腸を害ね、下痢、疝痛等で苦しい。加えて痔の工合も悪いとの訴であった。診察後食事に就き注意を与えた。

元来氏はこれ迄色々服薬をやった勢か内服薬と云うものに対し余り信用を置かぬ様に見えたから、肛門座薬で疝痛を緩和する事にした。（以下略）　（鵠沼海岸百年の厂史）

鵠沼郷土誌年表

伊藤節堂編

凡例

この年表はつぎの文献資料から集輯した。

（略記）　（文献資料）

市史	藤沢市史年表編
市史〇巻	藤沢市史第〇巻
皇国地誌	明治初期町村編さん「皇国地誌」
郷土誌	加藤徳右衛門「現在の藤沢」復刻版
郡史	高座地方事務所「高座地方の展望」
市史研	市史編さん室「藤沢市史研究」
教育研	藤沢市教育研究所「社会科資料」
大和史	大和市教育研究所「大和教育史」
絵日記	岸田劉生著「劉生絵日記」
藤沢風物	藤沢風物社「月刊藤沢風物」
藤沢の文学	北沢瑞史「藤沢の文学」
文学散歩	金子晉「江ノ電沿線文学散歩」
百年の歴史	高木和男「鵠沼海岸百年の厂史」
碑文集	伊藤節堂「鵠沼碑文集」
くげぬま	鵠沼地区広報委員会「ミニコミ紙くげぬま」
年譜	当該人物の既刊書の年譜

1144 天養元・9・8 義朝の乱行にあい鵠沼郷の魚・大豆等を略奪され神人など八人死傷 （市史）

1180 治承4・4・10 源頼朝鎌倉に幕府を開いて以来、鵠沼は幕府の直轄となる （皇国地誌）

1185 文治元・3・ 那須与一宗高鵠沼に一社を創建し皇大神宮を勧請す （皇国地誌）

1195 建久6・8・ 鵠沼毘沙門堂、修験祐範により開基 （皇国地誌）

1245 寛元3・ 荒木源海鵠沼に清光山万福寺を創建す （郷土誌）

1528 亨禄元・ 権少都長良元、密厳山普門寺を建立す （郷土誌）

1565 永禄8・9・ 鵠沼空乗寺、了受の開山、大橋龍慶の開基、金掘山と号す （市史）

1590 天正18・ 鵠沼は徳川氏の支配となる （皇国地誌）

1601 慶長6・3 鵠沼の中二二〇石分が布施孫兵衛重次の知行となる。残りは天領 （市史研）

1617 元和（げんな）3・ 鵠沼の中布施孫兵衛知行地以外約三〇〇石は大橋長左衛門重保の知行地となる（市史研）

1634 寛永11・ 大橋重保死亡により鵠沼の知行地はその子重政が継ぐ （市史研）

1649 慶安2・8・ 大橋重政采地の内九石を空乗寺に寄付し将軍家光の朱印を賜る （郷土誌）

1661 寛文（かんぶん）元・ 僧龍保鵠沼に一庵を建て、のちに善光山法勝寺となる （地誌、郷土誌）

1672 寛文12・ 大橋重政死亡以後鵠沼の知行地は天領となる （市史研）

1679 延宝7・ 代官成瀬重治、鵠沼幕領分を検地す。旗本布施重次鵠沼の知行地を検地す （市史）

1694 元禄7・9・ 鵠沼外五ヶ村猪鹿による作物の被害大きく難渋の旨訴える （市史）

1697 元禄10・11・ 鵠沼外七ヶ村の年貢米江の島より船積みされ江戸へ送られる （市史）

1728 亨保13・ 鵠沼辻堂海岸に鉄砲場設置 （市史）

1753 宝暦3・8 普門寺の半鐘作られる （市史）

1769 明和6・3 鵠沼村にて宗門人別帳作成 （市史）

1775 安永4・7 空乗寺領内渡船場のことで争 （市史）

1782 天明元・7・25 片瀬村と鵠沼村地引き網漁場をめぐり争い、評定所の裁許を仰ぐ （市史）

1808 文化5・8・15 浅場太市左衛門堀川を改修 （碑文集）

1821 文政4・10・ 万福寺の梵鐘作られる （市史）

1836 天保7・・ 鵠沼村、辻堂村鉄砲場の開発始む（市史）

1843 天保14・2・4 堀川、山上新右衛門高根地蔵建立（郷土誌）

1850 嘉永3・・ 片瀬、鵠沼、辻堂村に鉄砲場が増設（市史）

1858 安政5・・ 鵠沼村は細川越中守（熊本藩）の預かり地となる （皇国地誌）

1859 安政6・2・ 鵠沼村幕領（代官所管）となる（皇国地誌）

1864 元治（げんじ）元・・ 大暴風のため空乗寺本堂倒壊 （郷土誌）

1868 明治元・3・19 横浜裁判所をおく（神奈川県庁前身）（郡史）

・4・22 横浜裁判所を神奈川裁判所と改称 （〃）

・6・17 神奈川裁判所を神奈川府と改称 （〃）

・8・ 鵠沼村はすべて韮山県に属す（皇国地誌）

（藤沢市史第六巻では明治元・六・二九である）

・9・21 神奈川府を神奈川県と改称 （郡史）

韮山県管轄の鵠沼村は神奈川県管轄となる（皇国地誌）（藤沢市史第六巻では明治二・二・五である）

1869 〃2・6・17 諸藩主版籍奉還（郡史）

1870 〃3・11・ 鵠沼村毘沙門堂、堂宇を廃し、境内の地は高松祐重が所有 （市史）

1871 〃4・7・14 廃藩置県 （郡史）

・11・14 神奈川県と六浦藩を廃合して神奈川県とする （郡史）

1872 〃5・4・9 圧屋、名主、年寄などの称を廃し、戸長副戸長をおく （市史）

・7・12 鵠沼普門寺の物置を校舎として鵠沼学舎できる （郷土誌）

・7・27 暴風のため鵠沼沖にて難破船四艘溺死十人 （郷土誌）

・8・3 学制を布く（下等小学四年、上等小学四年） （大和史）

1873 〃6・5・1 区番組制を実施、区に区長、副区長をおく番組に戸長、副戸長をおく （市史六巻）

・5・13 鵠沼村は第十八区二番組となり、戸長三觜八郎右ェ門、番組扱所を大庭村におく（市史六巻）

1874 〃7・6・ 区番組制を改め大小区制を実施する区は大区、番組は小区となる。大区に区長、副区長、小区に戸長、副戸長をおく鵠沼は第18大区第2小区に編入。区長、戸長等区番組制下と同一人である。（小区会所大庭村） （市史六巻）

1876 〃9・1・1 鵠沼村戸数二九七、人口一、九二二人 （皇国地誌）

1877 明治10・5・22 鵠沼学舎の校舎が新築され鵠沼学校と改称、訓導久木元寿、助教三、生徒一一三名 市史六巻）

1878 〃11・7・22 郡区町村編成法の公布により大小区政廃止、神奈川県は一区（横浜区）十五郡となり、郡に郡長、町村に公選の戸長をおく（市史六巻）

・12・2 藤沢駅に高座郡役所をおく （市史六巻）

1879 〃12・2・1 鵠沼村の人家は字引地・車田・上村・宮ノ前・宿庭・清水・苅田・原・堀川・納屋・中東・大東・新田・石上の十四ヶ所に分居（皇国地誌）

・2・ 鵠沼宮ノ前に首塚の碑を建つ （碑文集）

1884 〃17・5・7 郡区町村編成法の改正により戸長の公選は官選となる（市史）各町村は連合戸長役場をおく（郡史）鵠沼村は羽鳥・大庭・稲荷・辻堂と連合、戸長三觜小三郎任命 （市史）

1886 〃19・4・10 小学校令公布尋常四年、高等四年となる （大和史）

1889 〃22・4・1 市制町村制施行、鵠沼村は連合組織から分れ一村で独立、役場を小字中井におく（郡史）

1892 〃25・3・19 小学校の名称は「何郡何村立尋常 （高等）何小学校」とするよう県通達あり （大和史）

・3・ 鵠沼学校は尋常鵠沼小学校と改称 （郷土史）

1895 明治28・6・ 鵠沼村で盛進社若尾製糸場始業 （市史）

この年伊東将行旅館東家を営む （碑文集）

1897 30・2・ 高松良夫鵠沼村村長に就任 （郷土史）

1900 33・ 小学校令改正により授業料廃止、尋常小学校の義務教育四年となる （大和史）

〃・10・8 鵠沼村農会設立される （市史）

1902 〃35・4・ 尋常鵠沼小学校に高等科併置 （郷土史）

・9・1 江ノ島電気鉄道（株）藤沢片瀬間営業（ 〃 ）

〃・12・20 鵠沼浦漁業組合認可、組合長山上八造（宿庭）幹事横田栄太郎（苅田）組合員十名（郷土史）

1903 〃36・11・ 颯田尼、上鰯五二一五〇に慈教庵建立（ 〃 ）

1904 〃37・3・ 賀来（かく）神社に帆足（ほあし）可成の句碑を建つ （碑文集）

1906 〃39・3・23 鵠六六四二に鵠沼郵便局開局 （郷土史）

・11・19 鵠沼引地一〇に郵便鉄柱函設置 （ 〃 ）

1907 〃40・3・21 尋常小学校の義務教育六年となる （大和史）

1908 〃41・4・1 藤沢大坂町・鵠沼村・明治村が合併して藤沢町となる （市史）

〃・6・14 初代藤沢町長に高松良夫を選出 （ 〃 ）

〃・9・17 鵠沼実業補修学校開講 （市史三巻）

1911 〃44・秋 志賀直哉鵠沼東家に来遊 （年譜）

1912 明治45・6・19 二代藤沢町長に金子角之助就任 （郷土史）

1915 大正4・1・ 武者小路実篤鵠沼に越す （年譜）

・4・18 武者小路から志賀直哉あてハガキ「僕の処は、川本たつ別荘方になった鵠沼海岸で郵便物は来る」とある （文学散歩）

1917 〃 6・2・22 岸田劉生、東京から鵠沼佐藤別荘（注鵠沼松が岡二ノ一）に移り、六月松本別荘（注、鵠沼松が岡四ノ七ノ一〇）に移る （年譜）

1918 〃 7・ 春谷崎潤一郎が鵠沼東家別館に移り、十一月支那旅行に出発 （文学散歩）

1920 〃 9・3・ 宇野浩二、鵠沼東家で執筆 （〃）

〃 ・4・18 鵠沼青年団創立 （市史三巻）

〃 ・4・ 作家中林夢想庵、鵠沼東家で中平文子と知り合い結婚 （藤沢の文学）

1921 〃 ・8・1 鵠沼に電話開設 （郷土史）

〃 ・8・20 県立湘南中学校を鵠沼819に設立 （市史）

〃 ・12・ 賀来神社境内に鵠沼海岸別荘地開発記念碑を建つ （碑文集）

〃 ・2・ 神明白旗稲荷に飯尾常吉翁頌徳碑を建つ （碑文集）

〃 ・4・20 県立湘南中学校開校生徒600人 （市史）

〃 ・10・ 鵠沼の作家今井達夫が報知新聞に「鵠沼にいた文人」と題し五回連載（藤沢の文学）

1922 〃 11・3・31 郡制廃止される （市史）

〃 12・1・ 宇野浩二鵠沼で作品「思い川」のモデルとなった村上八重（やえ）を知る（文学散歩）

1923 〃 ・4・ 鵠沼尋常高等小学校と改称 （郷土誌）

〃 ・9・1 大震災にて鵠沼尋常高等小学校倒壊仮校舎を営む （〃）

湘南中学校大破し応急修理し継続 （〃）

鵠沼海岸の慈教庵倒壊 （〃）

鵠沼海岸6642東家倒壊津波浸水 （〃）

全藤沢の被害、焼失6、全倒壊一、一三七、壊一、九一三、死者一〇二、全流失五（〃）

〃 ・9・10 東海道線全線不通のところこの日東京ー藤沢間開通 （〃）

〃 ・9・16 岸田劉生被災名古屋へ出発 （絵日記）

1924 〃 13・5・ 慈教庵堀川に再建 （郷土誌）

1925 〃 14・2・6 鵠沼六三一二に湘南学園創立 （教育研）

〃 ・3・ 鵠沼尋常高等小学校再建 （郷土誌）

1926
大正15・7・20　芥川龍之介、妻、也寸志の三人で東家から
イの四号（注、鵠沼海岸二ノ七ノ二）に移る（富士山）
・7・27　富士医師東家で龍之介を初診　（〃）
・9・20　龍之介は柴さんの二階家（注、鵠沼海岸
二ノ七ノ一八）に移る　（〃）
・9・25　斉藤茂吉と土屋文明龍之介を訪問　（〃）
・10・2　鵠沼海岸の蜃気楼現象を
高木和男撮影す　（百年の厂史）
・10・　この月川端康成龍之介の紹介で
富士医院に受診にくる　（富士山）
この年鵠沼の高瀬弥一が発起人となり
江之島水道㈱を創立　（郷土誌）

1927
昭和2・1・2　龍之介一家田端へ引きあげる　（富士山）

1928
〃3・11・26　三代藤沢町長に湯原直平就任　（郷土誌）

1929
〃4・4・1　小田急江の島線開通　（市史）

1930
〃5・2・13　四代藤沢町長に限川基就任　（郷土誌）

1931
〃・5・　鵠沼商業組合設立　（市史）
〃6・5・　鵠沼耕地管理組合設立　（市史）
〃・8・1　東京鉄道局の「海の家」が鵠沼海岸に開業
大人二〇銭小人一五銭バス藤沢駅から片道五銭（郷土誌）

1927
昭和6・　五代町長に一木与十郎就任　（郷土誌）
この年江之島自動車（株）・鵠沼乗合自動車、
土屋自動車商会が合併し藤沢自動車（株）
となる　（郷土誌）

1932
〃7・10・　鵠沼に小松製作所工場設立　（市史）

1933
〃8・10・　日夏耿之助病気静養のため鵠沼海岸に
転地し、九年一二月まで居住　（文学散歩）
〃・11・15　湘南学園に幼稚園開園　（教育研）
湘南学園小学校開園　（〃）
この年鵠沼の加藤徳右衛門「現在の藤沢」
を出版　（郷土誌）

1934
〃9・5・8　六代藤沢町長に大野守衛就任　（市史）
この年鵠沼1806に、みくに幼稚園開園（教育研）

1935
〃10・4・　引地川に太平橋竣工　（現地調査）

1936
〃11・8・31　片瀬ー大磯線県道（湘南道路）竣工（市史）

1937
〃12・12・1　日本精工、鵠沼へ移転　（〃）

1938
〃13・7・　県立鵠沼プール開場、藤沢町に
管理を委託　（〃）
この年、東家の当主長谷川欽一
東家を廃業す　（くげぬま）

1939
〃14・3・12 日本精工内に私立日本精工藤沢青年学校開校（市史三巻）
・3・31 私立湘陽中学校設置が認可され県立湘南中学校に併設（市史）
・4・26 青年学校は義務制となる（大和史）
・7・2 鵠沼の県営プール無償払い下げられ町営となる（市史）
・7・ 日本精工藤沢工場は陸海軍の管理工場となる（市史）
・9・22 鵠沼堀川農事実行組合設立（市史）

1940
〃15・7・ 鵠沼海水浴客のために品川・藤沢間に臨時列車増発（市史）
・10・1 藤沢町市制施行、藤沢市になる戸数六、三五七戸、人口三二、四七九人（市史）
・12・ 鵠沼辻堂＝漁業組合合併（〃）

1941
〃16・2・20 小学校令改正により小学校は国民学校となり、初等科と高等科となる（大和史）

1942
〃17・11・30 二代藤沢市長金子小一郎就任（市史）

1944
〃19・8・5 鵠沼海岸での海水浴は警察の許可を得た市民に限られる（市史）
・12・17 湘南中学校に併設の湘陽中学校の廃止認可（〃）

1945
〃・2・26 関東地方大雪善行 45cm 記録（〃）
・6・ 子母沢寛東京から鵠沼五五九四（注、鵠沼海岸7・15・4）堀川の別荘に移る（年譜）

1946
21・6・14 三代藤沢市長に飛島繁就任（市史）
・8・10 鵠沼6150に鵠洋小学校創立（教育研）
・夏 子母沢寛堀川から鵠沼6350（注、鵠沼松が岡5・1・16）熊倉通りに移る（藤沢風物）
・11・3 県立湘南中学校蹴球部第一回国体で全国優勝（市史）

1947
22・3・31 学校教育法公布され、小学校は六年中学校は三年となる（大和史）
・4・1 湘南学園中学校開校（教育研）
・5・5 第一中学校（鵠沼神明）及び鵠沼中学校（鵠沼桜が岡）創立（市史）

1948
23・4・1 県立湘南中学校高校として発足（〃）
・4・21 東京養老院藤沢分院鵠沼に開設（〃）
・4・24 四代藤沢市長に伊沢十郎就任（〃）

	・5・26	藤鵠農業協同組合設立	（市史）
1949	〃	・7・1	市警察署本鵠沼派出所設置	（〃）
	昭和24	・8・20	県立湘南高校全国高校野球選手権大会で優勝	（〃）
1950	〃	25・4・1	湘南学園高等学校開設	（教育研）
	〃	・12・16	横浜興信銀行鵠沼支店開設	（市史）
1952	〃	27・3・10	五代藤沢市長に金子小一郎就任	（〃）
1953	〃	28・1・4	秩父宮雍仁親王鵠沼別邸で死去	（〃）
1954	〃	29・1・24	関東地方大雪藤沢で30cm記録	（〃）
	〃	・4・1	鵠沼・片瀬の電話自動化完成	（〃）
1955	〃	・11・1	ニエ・アル記念碑李徳全女史序幕	（〃）
	〃	30・5・20	鵠沼伏見稲荷に高山昇翁頌徳碑を建つ	（碑文集）
1956	〃	・10・22	秩父宮記念体育館開館	（市史）
	〃	31・2・27	六代藤沢市長に金子小一郎就任	（〃）
	〃	・4・	鵠沼藤ヶ谷と片瀬新屋敷を結ぶ境橋掛替工事竣工	（〃）
	〃	・8・2	邦枝完二は戦争中から鵠沼に疎開していたが、この日自宅（注、鵠沼桜が岡二ノ一ノ二九）で死去、六十四才	（年譜）

1957	〃	32・6・20	本鵠沼郵便局開局	（市史）
1958	〃	33・3・3	鵠沼海岸に片帆橋竣工	（現地調査）
	〃	・6・	境川に上山本橋、引地川に龍宮橋完成	（市史）
1959	〃	・9・13	鵠沼の関東ヤクルト製造（株）操業開始	（〃）
	〃	34・2・12	鵠沼公民館開館	（〃）
	〃	・4・1	日本電気硝子（株）藤沢工場操業開始	（〃）
	〃	・5・	引地川に日の出橋竣工	（現地調査）
	〃	・9・29	鵠沼小学校火災	（市史）
	〃	・11・23	第一回市民俳句会を鵠沼公民館にて開催	（〃）
1930	〃	・11・29	第一回市民音楽祭を秩父記念体育館で開催	（〃）
	〃	35・2・26	七代藤沢市長に金子小一郎就任	（〃）
	〃	・7・13	湘南海岸公園完成	（〃）
1961	〃	36・4・1	鵠沼女子高等学校設立（前身、平塚高等家政女学校）	（〃）
	〃	・7・20	鵠沼プールガーデン開場	（〃）

1962
〃 37・7・19 消防署鵠沼主張所開設 （市史）
1963
〃 38・10・1 市立中図書館開館 （〃）
1964
〃 39・2・26 八代藤沢市長に金子小一郎就任 （〃）
〃 ・3・ 引地川に稲荷橋竣工 （現地調査）
〃 ・6・1 鵠沼保育園認可 （市史）
1965
〃 ・8・1 新住所表示鵠沼の一部で実施 （〃）
〃 40・3・1 小田急の特急えのしま運転開始 （〃）
〃 ・3・31 湘南海岸公園に平和の像完成 （〃）
〃 ・5・31 空乗寺大橋重政の墓が市の文化財に指定 （〃）
〃 ・9・1 鵠沼駅前郵便局開局 （〃）
〃 ・9・18 ニエ・アル記念碑再建除幕式 （〃）
〃 ・10・ 鵠沼神明、本鵠沼、鵠沼海岸で新住居表示実施 （〃）
1966
〃 41・3・ 引地川に高山橋竣工 （現地調査）
1967
〃 42・4・1 鵠沼に八部公園開園 （市公園課）
1968
〃 ・11・15 藤沢市人口二〇万人を突破 （市史）
〃 43・2・26 九代藤沢市長に金子小一郎就任 （〃）
〃 ・3・ 引地川に上村橋竣工 （市史）
〃 ・7・19 子母沢寛、鵠沼松が岡五ノ一ノ一六の自宅で死去（七十五才） （藤沢風物）
〃 ・7・31 鵠沼2121に市民会館完成 （市史）
〃 ・9・ 引地川に清水橋竣工 （現地調査）
1969
〃 44・3・ 引地川に、みどりはし竣工 （〃）
〃 ・6・ 市民会館前及び鵠沼橋そばに県下初のスロープ式横断歩道橋完成 （市史）
〃 ・9・22 渚橋下湘南遊歩道新設 （〃）
1970
〃 45・3・ 引地川に龍宮橋竣工 （現地調査）
〃 ・3・21 鵠沼女子高校鼓笛隊が万国博覧会で演奏 （市史）
〃 ・4・1 引地川に緑地公園開園 （〃）
〃 ・4・1 鵠沼海岸四ノ七に鵠南小学校創立 （〃）
〃 ・8・ 引地川に富士見橋竣工 （現地調査）
〃 ・8・10 市の木「クロマツ」市の花「フジ」に決定 （市史）
1971
〃 46・3・ 引地川に作橋竣工 （現地調査）
〃 ・4・1 鵠沼に神明保育園認可 （市史）
〃 ・11・3 鵠沼2162のメディカルセンターに市医師会が休日診療所を開設 （市史）
1972
〃 47・2・26 十代藤沢市長に葉山峻就任 （〃）

〃・5・　鵠沼2121中央図書館前に藤沢名誉民片山哲先生の像建つ　（碑文集）

1973
〃48・11・11　市民会館開館以来五、〇〇〇組目の結婚式が行われる　（市史）

1974
〃49・5・25　駅南口に江ノ電百貨店開店　（〃）
〃・6・7　江ノ電藤沢駅を江ノ電百貨店二階に移設　（市史）
〃・8・1　特別養護老人ホーム鵠生園開園　（市史）

1975
〃50・6・1　心身障害者福祉センター太陽の家開設　（市史）

1976
〃51・2・26　十一代藤沢市長に葉山峻就任　（〃）

（あ　と　が　き）

鵠沼の歴史年表については、私が入会した昭和五十四年当時からの私の要望であり、かつ念願でありました。

そしていつの間にか四年の歳月が流れ、花は移ろい、人は変わり、ついにこのようなかたちで私が編集することになりました。

名付けて「鵠沼郷土史年表」として内容は「源義朝から葉山峻まで」およそ八百年にわたる鵠沼の厂史の圧縮であります。

この年表の特色は、事項ごとに出典を明記したことであります。従って文献資料の索出が可能となり、鵠沼を語る者にとっては、最も便利な必携であると信ずる者であります。

ただ惧れることは、浅学非才の私が、事項を正しく取捨選択できたかどうかでありまして、先学諸兄の御指摘ならびに御教示をお願いする次第であります。

（昭和五八・六・一七編者誌）

昭和５８年７月１２日
鵠沼を語る会　発行

藤沢市鵠沼海岸２－１０－３４
鵠沼公民館内
電話　３３－２００１．２００２